萩城跡外堀地区の発掘調査

「ほっとやまはく」タイム㊺

やまはく×埋文センター

萩城下町は、江戸時代初期に長州藩毛利家の居城、萩城に隣接して形成されました。そして、その主要地区が2015年、世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産に認定されたことは、皆さんご存じのことでしょう。萩城下町は阿武川三角州を中心に広がっており、城の外堀によって武家地と町人地が隔てられていました。今、萩博物館や萩高などのある地区が武家地、菊屋横丁や江戸屋横丁などのある地区が町人地で、両地区の間には、幅約40㍍、深さ約4㍍の外堀がありました。

外堀は城の重要な防御施設で、城主にとってその規模が縮小することは望ましいことではありません。しかし、したたかな町人たちは堀ののり面に床を張り出す懸(かけ)作りの建物を築いたり、かさ上げして平坦地を確保したりして新たな町（南片河町の一部および北片河町）を生み出しました。その結果、江戸時代の半ばには外堀の幅は約16㍍にまで狭められていたようです。

こうして外堀内に進出した町人地は現在「萩城跡外堀地区」という遺跡名で呼ばれ、街路整備に先立って萩市と県埋蔵文化財センターによる発掘調査が1997～2004年度に行われました。

この時、埋文センターが発掘調査した面積は約1万2000平方㍍に及び、約70区画、平均間口7・4㍍の屋敷地が調査対象になりました。私は2年間発掘調査に携わりましたが、それはベテランを自負していた私でも当惑することの多い、特殊なものでした。

江戸時代の町屋の跡

保存された江戸時代の遺構

まず、遺跡の基盤となる層も、各遺構を覆っている層もすべて砂であることに戸惑いました。しかも、両者は色の違いがほとんどありません。砂ですから掘りやすいのですが、掘り過ぎが起こりやすく、遺構の掘方（ほりかた＝穴の輪郭）も不明瞭です。その一方、表面の砂を払っただけで、驚くほど良好な保存状態の遺物を目にすることができます。

掘り下げていくと、次々に出てくる石垣や平たん面（生活面）のどれとどれが同時期のものなのか判断に苦労することになります。町屋は最初、懸作りの構造でのり面に進出し、次に堀を埋めて石垣を伴う階段状造成地に、そして最後は堀幅約16㍍を残して、堀の上端の高さまで埋めて一連の敷地にしています。こうした造成や石垣構築が屋敷地ごとに違うタイミングで行われるため、隣り合う屋敷地の同じ高さの生活面の時期が異なる場合もあります。

この遺跡を掘って、初めて見るものも多く、有力商人の屋敷地からはヨーロッパ製ガラス瓶、国内流通しないはずの輸出向け古伊万里大壺、糸印（いといん＝当時コレクションアイテムだった銅の印鑑）などが出てきました。また、地鎮祭で撒銭（まきぜに）が行われており、1区画から640枚もの寛永通宝が見つかったことも驚きでした。遺跡全体では600枚を超える銭がまかれているようです。子どものおもちゃ、碁石、箱庭道具、植木鉢など、生活の潤いを感じる遺物もあります。子どもの無事な成長を願う「胞衣(えな)埋納容器」も多く目にします。これは、合わせ口にした焙烙（ほうろく＝豆・ゴマなどを炒る道具）に胎盤を納めて屋敷の床下などに埋めたものです。乳幼児死亡率の高かったこの時代の人々の親心がしのばれます。

江戸時代前期の火事で焼けた商家の土蔵も見つかりました。消火は諦めたらしく、貴重品も取り出さないまま、砂でかさ上げして後始末されていました。この事例は、富裕な商家の土蔵の中身を教えてくれました。納められていたのは、中国磁器や初期伊万里の食器セット、特注品とみられる大小数種類の萩焼組皿、茶道具、鉄鍋、青銅製の小型火縄銃、分銅、豆板銀4個などでした。

それにしても、比較的早い段階で外堀の半分以上が埋め立てられたのは意外な事実です。砂地に掘った堀なので、元来埋まりやすかったと考えられますが、藩が埋め立てを大目に見ていたという面もあったのでしょう。もしそうなら、平和な時代の訪れが意外に早かったことになります。

現在、県立山口博物館で開催中の「やまぐち大考古博」では、萩城跡外堀地区から出土した萩焼などの陶磁器や赤間硯（すずり）、奇兵隊陣屋跡から出土した「奇」字のある茶わんなどを展示中です。ぜひご覧いただき、江戸時代の空気を感じてみてください。

岩崎仁志（県埋蔵文化財センター事業課長）

▽次回は30日です。

現在の萩城跡外堀地区

山口県立山口博物館
ＴＥＬ083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで